研修の概要

光市立東荷小学校

学びをつなぎ、未来を拓く児童の育成
～複式学習で主体性を育む具体的な手立て～

１　研究の概要

【研修主題について】

本校は全校児童１９名の小規模校で、３・４年生と５・６年生は複式学級である。児童は、幼少期から同じメンバーで過ごしているため、お互いの結び付きは強い。生活の中では、互いに遠慮なく自分の考えを伝えることができるというよさが感じられる。学習の場面でも「ガイド学習」に馴染み、指示書に従って、意見を述べたり、聞き手はそれをしっかりと聞いたりすることができている。様々なかかわり合いの中で、他者の意見に触れ、考えに広がりが見られるようになったものの、一人ひとりの考えに深まりがあるかについては課題となっている。また指示書に従って学習を進めることができても、それが主体的な学習に繋がっていないという点も感じられる。

そこで、副主題を「複式学習で主体性を育む具体的な手立て」とした。少人数かつ複式学級という学習形態を生かしたり、学習活動を工夫したりして主体性を育む具体的な手立てを研究していくことで、高い学習意欲をもつ姿や、表現力豊かに発表する姿、ねらいに向かって粘り強く取り組む姿などが実現できるのではないかと考える。またその積み重ねによって、主題である「学びをつなぎ、未来を拓く児童の育成」につながると考えた。

２　研修主題解明の視点

・視点１　課題意識や学習意欲の向上につながる導入時の活動の工夫

〇前時や既習事項との比較

〇日頃の生活や他教科の学習内容と結びつきのある資料の提示

〇前時の振り返りとのつながり

〇児童の発言を生かした、めあての設定

・視点２　自己表現の場やツールの設定

〇ICT 機器のアプリケーションや、思考シートの活用

〇自分や友達の考え、思考を視覚的に整理するための板書の活用

〇学習のまとめを異学年で互いに発表し合う場の設定

・視点３　直接指導の設定や発問の工夫

〇意図的な直接指導の設定

〇学習を深めるための、揺さぶりの発問や資料の提示

３　研究の実際

（１）１・２学年　国語科

【第１学年　単元名「ことばを見つけよう」】

・視点１（導入時の工夫）

本時の学習内容に合う問題を提示することで、前時の学習内容や振り返りを想起させたり、前時との違いから学習意欲を高めたりする。

・視点２（自己表現の場やツールの設定）

児童が自分の考えを表現する際、穴埋め形式のワークシートを用意することで、書くことが苦手な児童が書けるようにする。

・視点３（直接指導の設定や発問の工夫）

間接指導の間に児童同士で考えを伝え合っていた場合でも、直接指導の際にもう一度説明するよう促すことで、学習内容の定着を図る。課題の確認や話し合いの中で新たに出てきた問題を教師が書き留めておく。

【第２学年　単元名「おにごっこ」】

・視点１（導入時の工夫）

ワークシートを使うことで、学習の見通しをもつことができるようにする。

・視点２（自己表現の場やツールの設定）

話型を示したり線を引いたりすることで、伝える活動にスムーズに進むようにする。紹介したいという意欲を高めるために、関連する本を用意しておく。タブレットの学習支援アプリを活用し、写真で記録して友だちと意見交換できるようにする。

・視点３（直接指導の設定や発問の工夫）

Which 型の発問をすることで、言葉の効果について考えることができるようにする。

【考察】

1・2 年生として単元を通した複式学習は、今回が初めてである。そのため、お互いに発表することを学習のゴールに設定するため、２つの単元を一緒に行った。しかし、本来国語科で複式学習を行うときには、学習内容をそろえることが必要であったが、今回は、「（１）言葉の特徴や使い方」と「（２）情報の扱い方」という別の内容を複式学習としたため、２学年のねらいにズレが生じることとなった。複式学習の基礎的な知識についても今回の授業・研究協議によって学ぶことができた。

・視点１

1 年生では、ワークシートを活用することで、1 時間の学習の見通しをもたせることができた。また、前時の確認問題を設定し、それを解くことで前時の学習内容を想起させることにつながった。２学年共に、前時を振り返ることで本時の学習の見通しをもつことができたが、教師が指示書の流れを意識しすぎたことで、児童の主体的な学習意欲向上を図ることができなかった。

・視点２

1 年生のワークシートを穴埋め形式にしたことで、書くことに苦手さを感じる児童も自分の意見は書くことができた。友たちに自分の考えを発表することが好きな児童が多いが、一方方向で伝えるだけで満足し、発想などに広がりをもたせることができなかった。２年生では、学習支援アプリでノート画像を貼り付けて意見交換をすることで、自分と友だちのものを並べて見ることで意見を比較、分類、集約することができた。

・視点３

２年生のガイド学習を自分たちで進められるようにしていたことで、複式学習が不慣れな１年生への直接指導の時間を確保することができた。しかし、２年生に直接指導が少なかったことで、課題の焦点化や思考の広がりを促すような発問やゆさぶりができていなかった。「わたり」や「ずらし」のタイミングを図ることの大切さを実感した。

（２）3・4 学年　算数科

【第３学年　単元名「分数」】

・視点１（導入時の工夫）

前時の学習内容や振り返りを想起させることで、学習の見通しをもたせたり、前時との違いから学習意欲を高めたりする。

・視点２（自己表現の場やツールの設定）

児童が自分の考えを友達に伝える際、「まず」「次に」「だから」といった話型を提示することで、順序立てて説明しやすくする。また図の操作等の活動を取り入れることで、具体的なイメージをもたせる。

・視点３（直接指導の設定や発問の工夫）

間接指導の間に児童同士で考えを伝え合っていた場合でも、直接指導の際にもう一度説明するよう促すことで、学習内容の定着を図る。また、説明への称賛や助言の言葉を掛けることで、自信につなげたりする。さらに、深い学びに繋がるように、課題に応じた揺さぶりの発問を提示する。

【第４学年　単元名「がい数とその計算」】

・視点１（導入時の工夫）

概数の表し方について学ぶ場面では、教科書にある、スタジアムの入場者数を詳しい数値で公表しているテレビ放送と、概数で公表している新聞記事の２つを提示するなどして、数量を大局的にとらえることのよさを感じられるようにする。他の時間でも、児童にとって身近な場面を提示することで、学習内容と自分達の生活との繋がりを感じやすくする。お金を模した紙を用意して買い物体験の活動を設定することで、自分たちの生活に生かすことができるようにする。

・視点２（自己表現の場やツールの設定）

概数の表し方と概算のどちらの学習でも、自分の考えを友達に伝える活動をスムーズに行うことができるように、話型を提示したり、教科書の説明の例文を参考にするよう促したりする。

・視点３（直接指導の設定や発問の工夫）

どちらの方法の方が考えやすかったか、といったように、which 型の発問を提示することで、二つの考え方それぞれを改めて振り返る機会としたり、思考の焦点化を図ったりする。

【考察】

・視点１

分数の足し算を想起させる復習問題を提示したことで、引き算に対する関心を高めたり、復習に加えて、薬の年齢制限の例を提示したりすることで、既習事項を生かしながら本時の課題を把握できた。また、生活との繋がりを意識することで課題を捉えさせたりすることもできた。導入時と展開時の学習内容が合わないことで、児童の思考が混乱した。

・視点２

３年生の学習では、計算の考え方を説明するツールとして、タブレットを活用し、図を操作できるようにした。そのことで、分数の計算の考え方を視覚的にも捉えることができていた。また児童全員の、説明の場を保証できたという意味でも、一人一台端末のよさを生かすことができた。考え方を説明する方法以外でアウトプットすることで、学習内容の理解を深めることに繋がった。４年生では、思考の流れに沿ったスモールステップで進めることのできるワークシートを活用したことで、内容理解の手助けになっていた。同じような説明にならないよう、数直線の図を設定したり、友達の説明に対して様々な反応の仕方を提示したりする必要があると感じた。２人の学力差が大きく、全体的に活動が停滞する場面が多く見られた。そのため、児童間で課題を解決していくという関係づくりを目指していきたい。

・視点３

３年生は間接指導中に、自分たちだけで分数の計算の考え方を説明し合うことができていた。さらに、到達度の確認をするために、算数科の見方考え方により迫る揺さぶりの発問を投げかけたことで、夢中になって説明しようとする姿が見られた。４年生では、簡単な数字で例を示しながらそれらの違いを説明したことで、納得感をもった理解に繋がったと感じた。

（３）５・６学年　国語科

【第５学年　単元名「たずねびと」】

・視点１（導入時の工夫）

物語の舞台となる場所をつかむために、写真資料などを用意する。物語の展開や心情表現を見つける学習では、既習の学習の仕方を生かしながら、「起承転結」に合わせて物語の展開を追っていき、スムーズに読み取りの学習に入れるようにしておく。

・視点２（自己表現の場やツールの設定）

読み取りに対する抵抗も少なく、自分の力で学習に取り組めるようにするため、キーワードを本文中から見

つけ出すようにする。学習活動のハードルを低くし、自分から学習課題に取り組めるようにするため、ワークシートを用意する。

・視点３（直接指導の設定や発問の工夫）

学習の前半は、直接指導を主にして、読み取りに必要なキーワードやキーセンテンスを線で結び付けながら児童とともに物語の内容や展開をつかむようにすることで、児童が抵抗なく学習に参加できるようにする。

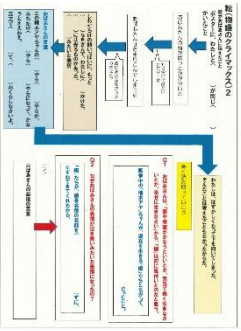
【第６学年　単元名「やまなし」】

・視点１（導入時の工夫）

資料「イーハトーブの夢」を先に学習することで、作品に込めた思いに迫っていけるようにする。本時においては、特に「かわせみ」と「やまなし」を対比できるワークシートを用意することで、自分の考えを整理できるようにする。

・視点２（自己表現の場やツールの設定）

「一人学び」の時を確保するとととともに、考えを伝えたり、感想やアドバイスを受け取れたりする学習の流れをつくる。



・視点３（直接指導の設定や発問の工夫）

「やまなし」のもつ意味と宮沢賢治の生き方や考え方の似ている点について、焦点を絞って追求するよう働きかける。

【考察】

・視点１

イメージ作りに役立ちそうな写真資料の提示により、様子を画像として捉えたことで、表現への抵抗感が少なくなり、内容理解にスムーズに取り組めたと感じている。物語の展開を視覚的に追っていけるように掲示したことで、連続したものとして捉えることができた。「やまなし」においても、２つの情景を視覚化することで、物語世界にスムーズに入っていけた。これらの手立ては、児童の意欲を高めることにもつながった。

・視点２

５年生のワークシートでは、物語の展開や心情の変化に気付かせる工夫をしたことで、抵抗感なく手がかりとなる文章表現に目を向けながら自分の考えをまとめられた。６年生は、グループワークの形をとりながら、お互いに補完し合う形をとるようにしたが、これらの手立ては、児童の多様な考えを引き出すことにつながらないと感じた。

・視点３

「つかむ・考える・深める・つなげる」の流れに沿って、２学年で学習活動をずらしながら取り組んでいるが、実態からは難しいため５年生の直接指導に重点をおいた学習活動を仕組んだ。これによって、きめ細かな指導が可能になった。６年生には、予想される考えを想定したゆさぶりの問いも用意する必要があった。多面的な見方ができる問いかけの用意が重要になる。

４　研究のまとめ

今後、児童の主体性をさらに伸ばすためには、共学びの活動の設定が重要になると考える。「自分の考えをもつ」という本校児童の強みをもとに、伝えるだけでなく、比較や分類、集約などの活動も児童が自分たちで行うことができると、主体性の育成や深い学びへの実現につながるのではないだろうか。

令和７年度から大和地域４小学校が１校に再編され、束荷小学校としての存続は今年度を入れて残り２年である。さらに「複式学習を充実させたい」「束荷小学校ならではの複式学習を通して、児童に力を付けたい」という意欲を燃やして研修を続けている。児童に「確かな学力」という形として現れることをめざして取り組むことで、再編された小学校で、複式学習を経験してきた束荷小学校出身の児童が、自分の言動を自分自身で決め、友達と良好な関係を築き、共同して問題解決をする、そのような主体性のある生き生きとした姿を見せてくれることを大いに期待しながら、今後も研修に励んでいきたい。